

人のこころを動かす、土木

How does Civil Engineering affect our minds ?

特集担当主査：鈴木春菜

特集企画担当：鈴木三馨、千々和伸浩、長塚麻子、西山孝樹

Civil engineering not only makes life more convenient and stimulates economic growth but also affects the attitude, motivation, and emotional state of people. We are often impressed by the scale of structures, the timeless presence of infrastructure, and how civil engineers express their ideals in physical form. A good example is the Shinkansen, which has raised public awareness and has become a national symbol in Japan, despite initial public disapproval. Infrastructure can enhance attractiveness of place and people's attachment to their place. Therefore, many recent civil engineering initiatives have used communication to try to modify people's attitude and behavior.

Nevertheless, the changes in the landscape and lifestyle caused by infrastructure may negatively affect public sentiment. Therefore, consideration of the influence of infrastructure on our minds could add real value to civil engineering works.

This special issue focuses on how past civil engineering works have affected our minds. The first article describes the theory of correlation between infrastructure and the human mind. The following articles introduce infrastructure projects, with focus directed toward their effects on the human mind.

出典：Web サイト「土木ウォッチング」(撮影：依田正広)
関連記事 子や孫と楽しむ土木コンテンツ

土木という営みは、土木構造物やそれととりまく社会制度を整備し、そして利活用することを通じて、生活の利便性や社会の頑健性を高め、社会経済の活性化をもたらすものである。

しかし、それだけではない。土木構造物の整備は、人びとの交流を喚起し、活動の幅を広げ、さらには、人びとがくにつくり、まちづくりに関わる機会をつくり、人や地域の潜在能力を高め、モチベーションや行動力の源泉となる。

たとえば、東海道新幹線。整備時には不要論が根強かったにも関わらず、その整備は世論を変容させ国民意識を高め、わが国のナショナル・シンボルとなるに至った。また、大規模災害の後には鉄道や道路の復旧が復興のシンボルとなり人びとのこころを励ますことも少なくない。会員諸氏の中には、土木構造物のスケールや時代を経て色褪せない存在感に感銘を受け、それによってきっかけとしてこの営みに身を投じるようになった方々も少なくないのではないだろうか。

ほかにも、自然環境や地域景観を保持し楽しむための構造物など、「土木」は時にわれわれのこころを高揚させ、穏やかにする。そして、地域の魅力を高めることに

よって、人びとの地域への愛着を育み、地域全体の活力を増進することに寄与する。

あるいは、土木に携わった先人たちの理想や行動に感化されるということもある。国土と民を想った高邁な思想、目を張る行動力はわれわれ土木技術者のみならず、多くの人のこころをひきつける。

さらに、最近ではモビリティ・マネジメント(MM)やリスク・コミュニケーションと呼ばれるような、直接的に人のこころに働きかける取組みも広まっている。

もちろん土木は、感動を与えるばかりではない。構造物がまちの景色を変え、生活の変化をもたらすことによって、人のこころを乱し、あるいは寂寥の念を与え、活力を低減することになってしまいうこともあるかもしれない。

『もし工学が唯に人生を煩雑にするのみものならば、何の意味もない。工学によって数日を要するところを数時間の距離に短縮し、一日の労役を一時間にとどめ、人をして静かに人生を思惟せしめ、反省せしめ、神に帰るの余裕を与えないものであるならば、われらの工学はまったく意味を見出すことはできない。』とは、第六代の廣井勇会長長の言葉である。

われわれの事業がいかに人のこころに影

響を及ぼすか、ということを見つめてこそ、真に文明の成熟に寄与する土木、

につながるのではないだろうか。それは、事業の計画や評価の際にのみ検討するということではなく、一連の事業にかかわるすべての技術者が常にこころに留め、折に触れて思惟し続けるという、土木技術者としての基礎的な素養ではないだろうか。

本特集では、これまでの土木事業について、人のこころをどのように動かしてきたかという視点から改めてとらえ、紹介したい。そして、われわれの営みが今後どのように人のこころを動かしてしまいう可能性があるのか、について考える契機としたい。

はじめに基調論説として、京都大学・藤井聡氏に土木整備がいかに本質的に人のこころをかたちづくるのか、ということ論じていただいた。さらに、東京大学・渡辺裕氏に、美学研究の視点から、当初整備時から世論の受け止め方が変化してしまいうような整備に対してどのように向き合うべきか、について首都高速道路を題材に寄稿いただいた。

次に、インフラ整備が地域の経済や人の心・行動に及ぼす影響について、多様な観点から事例を紹介する。まず、今春北九州―宮崎間が全線開通した東九州自動車道の

影響について、宮崎県商工会議所連合会

頭である米良充典氏にお話いただいた。また、身近な道路整備事業の影響について、出雲大社門前の神門通り整備に携わられた多々納光教氏に、住民の立場からお話いただいた。次に、広島太田川の整備によって人が「集う」事例を熊本大学・田中尚人氏に、近年の自動車依存が児童の発達に影響を及ぼす可能性についての論考を交通ジャーナリストの鈴木文彦氏に、ご紹介いただいた。また、インフラ観光の可能性について国土技術センターの佐々木正氏に、マニアから見たインフラの魅力についてダムライターの萩原雅紀氏に、それぞれ執筆いただいた。

そして、展望として、人の心に働きかけ、まちづくり・くにつくりを進める取組みを紹介する。交通まちづくりがどのように人のこころを動かすのかについて、愛媛大学・松村暢彦氏に論じていただくとともに、JICA・西宮宜昭氏にインフラ整備を通じて平和構築に向けた意識がどのように醸成されるかをご紹介いただいた。

本特集によって、土木的営みが有史以来いかに人を動かしてきたのか、という点に改めて思いを馳せるきっかけとなれば幸いである。